

[体験版]

第二章



……人間の女は抱き飽きた。

多少容姿の違いはあれど、大体似たような反応で奉仕の内容も、それほど差があるわけではなかった。

はじめの内は、夜伽と称しメイドを代わる代わる寝所に呼びつけ、その些細な差を楽しむ余裕があったが……

やはり慣れとは恐ろしい。

目を閉じると、今までの女を抱いているのが違いがわからなくなっていた。



私は、しがない地方都市の領主である。  
当然、中には大きな声では言えない繋がりもある。  
そんな中で、ある一人の好事家からこんな話を聞いた。

雌型獣人：…いわゆるモンスター娘が、人間にはできない  
マニアックなプレイを楽しめるぞ…と。

自他共に認める好色な私は、早速屋敷のメイド4人を  
全員解雇し獣人専門の奴隷商に連絡を取った。

そして屋敷に連れてこられた雌型獣人たち。  
本来は人間に牙を剥くモノもいるようだが、既に洗脳済で  
主人に従順であるらしい。

商人の薦めと私の好みから、次の三体をメイドとして  
召し抱えることとした。



下半身が蛇のラミア種。  
寒さには弱いのが、高所作業が得意らしい。  
性的嗜好としては、その長い尻での特殊な  
プレイが大好きなのらしいが。

「…初めまして、ご主人様。  
何なりとお申し付けください」

凛とした視線を向けてくる。  
この目は人間でも見たことがあ  
何かを諦め、自らを律して命令に従う…  
そんな目だ。

名前は「カリン」です。



下半身が趾行性しゅうぎせいをもった  
動物のソレの、サテュロス種。



非常に豊かなバストをもつ種族で  
特に重点的に仕込まれているらしい。  
楽しみだ。  
メイドとしては家事全般が優秀だとのレビュー。

「あ、あの…その…  
よ、宜しくお願いします…」



ミリアとは対照的に、オズオズは、  
こういふ娘も、人間で見たことがあ  
る。アピールの激しい女より、ま  
じろいふ娘のほろが情事に耽り  
やすい傾向だった。

名前も「エステイ」とした。



稀少なスライム種。  
人語は片言だが非常に従順で  
体が軟体のため、様々なプレイに対応できるらしい。  
3体の中では特に値が張ったが、その特殊性を買った。



「……ココが 新シイおうちや？」



何を考えこんでいるのか、その意味もわからぬまま  
まったくわからぬ。まさしく人外といえる娘だった。

名前も「ライム」とした。

奴隷商は、去り際に

「あまりハマり過ぎならよんで」

との忠告をしていた。

ハマるかどうかは彼女たち次第だ。

せいぜい遊んでやるとしよっ…

さて…メイドとしての技能はもうもう  
確かめるところで。

何はなくともまずはセックスだ。

ああ、人外とのセックスなど初めてで慣れる。

まずはミラを寝所に呼び出した。

蛇体を器用にくねらせ、床を這ってくる。  
石造りの部分は良いが絨毯だと大きikutたわみ  
移動し辛そうだ。  
私はベッドサイドに腰掛け、ミラを見上げた。



「ようこそ我が屋敷へ。  
お前は今日から私のモノだ。  
…まずは何をすれば良いか、  
わかるな？」

「…やはり、それが目的ですか」

「他にあるとどうもー」

「いいえ」



主人とメイドという立場を利用して  
その気ではない女たちを  
何度もこのように促してきた。  
ここは人間もモンスターも大差なかった。

「まずは口でして貰おうか」

「…わかりました」





ミリアは跪き(その表現でE111のたろつか)  
私の股間に顔を寄せ、口を少し開いて長い舌を  
巻き付かせてきた。

長い。人間の舌の3〜4倍はあるとか。  
私のペニスを巻き付き、緩やかに締め付けながら  
上下する。その舌はひんやりしていた。

「…」

「痛いですか？」

「いや、気持ちさらさら…そのまま続けてくれ」





うっ…ヌメリそのものは人間と変わらないが…  
このひんやりとした感触！  
これはクセになりそうだ…

おの

おの

おの



「だ、おちきょー！」

「く……はい……！」

「おほほほ」

「おほほ」

「おほほ」





Large white and yellow calligraphic text on the man's black shirt, appearing to be stylized characters.

Large white and yellow calligraphic text on the man's black shirt, appearing to be stylized characters.

White speech bubble containing a black silhouette of a woman's face, positioned near the woman's head.

White speech bubble containing a black silhouette of a woman's face, positioned near the woman's ear.

White speech bubble containing a red silhouette of a woman's face, positioned near the woman's hair.

White speech bubble containing a blue silhouette of a woman's face, positioned near the woman's leg.

White speech bubble containing a red silhouette of a woman's face, positioned near the woman's skirt.

Blue calligraphic text on the woman's green skirt, appearing to be stylized characters.

長い舌が自らのペニスを巻き付いている、と、  
非日常的な光景を見ながら果てた。  
ミラの端正な顔に白濁した液体が付着した。

「はあ…はあ…」

「…ミラ？」

顔が少し上気しているようだが…  
今ので興奮したのかわ？」

「そ、そんなこと…ないです」

「本当か？  
…そうだ、見せてみる。  
ラムミアの生殖器を。」

「えっ…」

「まだ見たことが無いんだ。いいだろう？」

「…お、わかりました…」

私はベツェトエトエトがら、ラムミアもエトエトがら命じた。  
ラムミアは私の脚の間に割って入り、メイドエトエトを  
めくって見せた。

人体と蛇体の境目の下あたりに  
ヌメヌメとした割れ目があった。  
人間のソレとは色も形も違う。  
クリトリスのような突起部分も無い。

くはあ...

「ご、これで  
良いですか...」

かあ...

が、それでもわかる。  
ここが排泄口であり  
性行為をおこなう雌穴なのだ、と。

-体験版につき、次のシーンに急ぎます-

ミリアは、ペニスを引き抜く時にもイキ  
かなりの回数、絶頂に達し

よるよると寝所を後にしていった。

よし…では少し休んで次の娘を呼びよっせ。

暫く経ち、次はユラステイを呼び出した。



キヨロキヨロと周囲を見回し、落ち着かない様子だ。  
先程同様、私はベッドサイドに腰掛けユステイを  
見上げた。

「ユステイ。ここに呼び出されたという事は  
どういう事かわかるか？」

「あ、あの…そのお…」

ユステイは頬を赤らめ視線を反らした。  
どうやらわかっているようだ。

「任込まれているんだらう？ その乳房での奉仕を」

「あうう…えつと…はい…」

「では早速披露して貰えるか？」

そのためにお前を召し抱えたのだからな」

「あ、わかりましたあ…」

態度や口調には、多分に羞恥が含まれているものの  
命令には従順だった。  
商人の言う通り、**躡け**が行き届いているようだ。

それにしても見事な爆乳だ…  
人間だとここまでサイズの大きな見たことがない。  
いたとしても、柔らかすぎてパイズリには向かないのだ。  
さて、この娘はどうかな…?



差し出された乳房を遠慮なく揉みしだく。  
かなりの弾力で重量もありそうだ。  
これならば…

「んっ…あまっ…」

「やます…」

「あまの

んん

んん

んん

んん

乳を揉まれ、みるみる顔を紅潮させていくユズティ。  
なかなか初々しい反応を見せる。

乳の重みを楽しみながら、乳首を弄る。  
段々硬度を増す桜色の突起…

「あ、やああ…」

「気持ちいらんのか？」

「うう…はい…きもちいいです…」

下半身がケモノだろうと  
パーツが人体と同じであれば  
やはり感じる部分も同じなのか。

「…じゃあ挟んでくれ」

「…はあ…はあ…」

わ、わかりましたあ…では、失礼しますねえ」

「んっ…」

「母乳が出るの？ 孕んでらるのか？」

「ちがうんです…私たちの種族は  
みんな出ちゃうんです…お嫌でしたか？」

「いや、大丈夫だ続けてくれ」

「ほいっ…」

ゴックン

ゴックン

ゴックン

なるほど…それを潤滑油代わりにするのか。  
びゅるびゅると乳首から迸る液体…  
妊婦との経験は無かったので、これも新鮮だ。

「では…失礼しますっ…」

豊かなバストに包まれるペニス。  
このサイズでありながら、程よい弾力…  
そして母乳でヌメツた乳内…  
これは、期待で溢るぞ…!!

「いかが…ですかあ」

「ああ…うん…そのまま続けてくれ」

まるで膣に挿入しているかのような圧で  
ペニスを挟み扱き上げるユスティの乳。

亀頭が谷間から顔を出さない。  
それほどまでにユスティの乳房は豊満だった。

「んっ…ふぁ…」

「…おはきゅ…」

「はっはっ…んん…」



「んっ……んふっ……」

勢いよく飛び出す……ということではなく  
谷間から泉のように自濁が溢れ出してくる。  
完全にペニスを覆い包んでしまうっ、これが  
サテユロス種のパイズリ……

人間の女でも不可能という事はないだろうが  
なかなか良い体験だった。

そうなるとう、当然もう一つの「違い」を  
私は知りたくなる。





ベッドに上半身を預け、尻をこちらに  
向け突き出す格好を取らせる。  
体毛を掻き分け、性器を探し出す。

「ほほう、ここか」

「やああ…あまり見ないでください…」

「ふんっ…」

-体験版につき、次のシーンに急ぎます-

朦朧としていているユースティを部屋に戻す。  
次からは場所を考えないといけないな。  
私は水浸しのベッドを見ながら独りごちた。

そして暫く休憩し、最後のモンスターメイトである  
ライムを寝所に呼びつけた。

ぺちゅ。ぺちゅ。と足音を立てて歩いてくるライム。  
不思議と足跡が濡れているといった事は無かった。

ベッドに腰掛けた私の前でライムは口を開く。

「ゴシユジン。なにをする？」

「…お前に性的な奉仕を命じたい。わかるか？」

「ワカル！  
ゴシユジンを気持ちよくすればいいな？」

「そうだな、やってくれ」

「わかった。では二人でやるわ」

「何？」

驚くことだ、ライムはその身体を分裂させ「一体となった。  
ミラやユステイは「人間と比べてどうだ」という感想が  
あったがコイツはそんな次元ではなかった。

「サア……ちからぬらて」

「はいおはらい」





ライムたちは左右に分かれ、私を包み込んだ。  
圧倒されながらも、性欲は正常に働いているようで  
彼女たちの乳房に手が伸びていた。  
それが本当に乳房なのかはわからないが。

透き通った身体だが、人肌のような温度だった。  
感触は、水を入れたビニール袋のようだ。  
決して嫌な感じではない。程よい触り心地だ。

「んっちゅ…」

フフ…

いっぱいナメテ吸ってアゲル」

「コツチも…」

だんだんカタクなつてきたね

ゴシユツパン」



ライムの妙技に身を委ねていた。  
ライムの口内からも唾液のようなものが分泌しており  
二人の体液が混ざり合う...

「ちゅる...」

サア

モツト混ざれ...」





手コキを担当するライムも  
時折手の平からヌメった  
ローション状のものを分泌させ  
ペニスを心地よく撫で回す。

「ん……く……凄いなこれは……」



ヌ

ヌ

ヌ

ヌ

「イク？」

「ンヤセーしてイクよ？」





「ほら」

「ポラ」

「う、うめめめ...!」

巧みに亀頭や鈴口、カリを  
最良の力加減でシゴくライム。  
こんなただの手コキでっ...!!



「アッ...」

「ラブ、出た！」

「セーエキきたあ...」

「あえなく射精させられてしまった...」

「溜まっている時ならともなく、既に何度も出した後なのに...」

「このライムという娘、ある意味アタリかもしれないな。」



「セックスする？」

「カラダのナカにセーエキくれる？」

ライムたちが潤んだ瞳を向けてくる。  
…潤んでいるというか、ほぼ液体みたいなものだが…

とにかく、キコキキでマゴマゴまでならナカも凄いのだからと  
期待を膨らませ、セックスを命じた。



一体は私と対面する形で。  
もう一体は背後へと回った。

「アイレルよ？いい？」

「ああ…たのむ…」

今度こそ明らかにヒトのソレとは違う挿入口。  
だが、それでもわかってしまう。  
そのヌメリを帯び糸を引き、ペニリスサイズに開いた穴は  
雄を射精させるための穴なのだ。

-体験版につき、次のシーンに急ぎます-

ライムはふたたび二体へと融合し、部屋へ戻っていった。  
凄い体験だった。まさしく人外と交わってしまった  
といった感じだ。





ラミア種のミア…  
冷静でうな振る舞いだが、セックスで豹変するタイプだ。  
今後も色々仕込んでやるわ。





サテュロス種のユステイ…  
あの爆乳と、それに似合わない加虐心を煽る態度も  
評価に値する。  
イキつぱりも男を昂ぶらせる効果があるな。

スライム種のスライム…  
あとで聞いた話だが、元々不定形の彼女らは  
人間とまぐわうため  
あのような人体を模しているのだとさう。  
逆に言えば性交に特化してらるゆえに  
おんなは。





これから楽しくならんぞうだ。

これは三分の間楽しめそうだ...  
フッフフ...明日はどっし遊んでやるわな...

体験版はここまでとなります。  
それでは製品版にてモン娘ライブを!